

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

水俣病を伝えるという運動：
ブルデュー実践理論によるアプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 京之介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009169

水俣病を

伝えるという運動

ブルデュー実践理論によるアプローチ

文・写真
平井京之介

現在の水俣病運動とはどのようなものか、それはいかにしていまの形態をとるようになったのか。2005年以来、わたしは自ら運動に深くかかわりつつ、こうした問いを考えてきた。本小論では、フランスの民族学者・社会学者、P.ブルデューの方法論を手がかりとしてこれらの問いに答えようとするわたしの構想を紹介したい。

以下では、まず、なぜいまわたしが水俣病運動に注目するのかという点についてふれる。次に、これまでの研究においてブルデューの「ハビトゥス(habitus)」概念をどう利用したかを略述する。続いて、ブルデューの「界(champ)」概念を用いて水俣病運動の変遷を記述しようとする現在の構想について述べる。そして最後に、2018年に新たに採択されたプロジェクト「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」(科研費基盤研究(C)18K01182)のなかで取り組もうとする課題を紹介したい。



水俣市茂道漁港での相思社水俣まち案内(2013年11月)。

水俣病を伝える

1970年代初頭、水俣病運動は「闘争」といわれるほど過激なものだった。デモや座り込みなどの直接行動がさかんにおこなわれ、「水俣病を告発する会」など、全国各地にそれを支援する団体が存在した。1973年に熊本水俣病第一次訴訟で原告が勝訴すると、事態は沈静化するかにみえたが、新たに多くの被害者が名乗り出て、その後も紛争が続いた。ようやく和解に向けて動き出したのは1990年代に入ってからである。

この頃、一部の被害者団体が「水俣病を伝える」活動に着手する。行政も、「環境創造みなまた推進事業」と名づけられた一連の施策や、1993年の水俣病資料館の開館などでこの動きに追随した。そして1995年の政治解決によって被害者の救済問題がいったん決着をみると、こうした活動は行政と被害者団体との共同で実施されるようにもなった。一部で係争状態は続いたものの、以後、水俣病を伝える活動は拡大し続けており、現在の水俣では、多くの被害者団体、支援者団体、国、県、市とその外郭団体、さらには企業までが、個別に、あるいは共同で、水俣病を伝える活動に携わるようになっていく。

それでは、「水俣病を伝える」活動とはどのようなものか。わたしが調査している水俣病センター相思社(以下、相思社)の例を紹介しよう。

相思社は、1974年、全国からの寄付によって、水俣病の多発地の近くに設立された、支援者の団体である。当初は、デモや座り込み、訴訟などの被害者による闘争を支援していたが、1990年代に入り、「水俣病を伝える」ことを活動の中心に据えた。彼らの水俣病を伝える活動には、水俣病歴史考証館(以下、考証館)の運営、「水俣まち案内」、語り部による講話、被害者体験談の収集と出版、機関誌の発行、ホームページやメールによる情報発信、出張講演、学習旅行の企画および実施支援、資料室での水俣病関連資料の提供などがある。

彼らはこうした活動を通じて、人びとに水俣病とはなにかを紹介している。多くの人びとは水俣病という名前を知ってはいても、教科書的な知識しかもっていない。現在にいたるまで水俣病によって被害者が差別や偏見に遭っていること、補償や救済の問題が完全には解決されていないこと、地域社会が分断されている



水俣市内のホテルでの相思社による出張授業(2013年11月)。

ことを知らない。それゆえ水俣で起こったこと、現在も起きていることを伝え、自分たちの社会や生活について反省する素材を提供することが必要だと相思社は考えている。

わたしはこれまで計16ヶ月に及ぶ現地調査を実施し、彼らの水俣病を伝える活動にいっしょに取り組み、観察してきた。そして実感として、この活動に社会を変革する力があると考ええるようになった。では、この変革の過程をどのように記述できるだろうか。水俣病を伝えることは、いかなる意味で社会運動といえるのか。

ハビトゥスという概念

水俣病を伝える活動を記述するのに、わたしはハビトゥスという概念を利用してきた。ハビトゥスとは態度、様子、習慣などを意味するラテン語起源のことばであり、ブルデューが彼の実践理論のなかに導入したことによって一躍有名になった。すでにブームは去った感があるが、それでもその重要性が薄れたとは思えない。2002年のブルデュー逝去後、これまであまり使われてこなかった分野で、ハビトゥス概念はより自由に使用されるようになっていく。

ブルデュー(Bourdieu 1977)によれば、ハビトゥスとは心的諸傾向のシステムであり、人びとは慣習的にこれに基づいて現実を知覚し、評価し、行動する。これは子どもの頃からさまざまな状況で実践を繰り返すことによって獲得される身体化された知識であり、実践的な能力である。ハビトゥスがとらえにくいのは、そ

れ自体は直接観察可能な事象ではなく、繰り返される実践の観察から演繹される分析的な概念であることにある。人びとの実践と客観的な社会構造とを媒介するのがハビトゥスなのだ。

現在、ハビトゥス概念は社会学や人類学だけでなく、教育学、政治学、言語学、経済学、組織論などで幅広く利用されている。社会運動研究においても、N.クロスリーをはじめ、この概念を用いた試みが近年になって展開している (cf. Crossley 1999, 2002, 2003; Haluza-DeLay 2008; Husu 2013; Ibrahim 2015; Samuel 2013)。基本的にわたしのハビトゥス概念を用いた水俣病運動の分析も、こうした一連の研究に連なるものである。

彼らの研究が目するものは、運動への参加に向かう人びとのハビトゥスである。クロスリーはこれを、「抵抗のハビトゥス (habitus of resistance)」ないし「急進的ハビトゥス (radical habitus)」と呼んだ。これには運動への動機づけだけでなく、参加に必要な知識や能力も含めて考えられている。運動の実践はこのハビトゥスをもつ行為主体によって生み出されるが、一方で運動への参加を通じてこのハビトゥスが醸成される。一種のトートロジーに聞こえるかもしれないが、他のハビトゥスと同様に、運動のハビトゥスも、子どもの頃から家族とともにささやかな運動や抗議に参加するなかで知らず知らずのうちに身につけ、蓄積されていく心的諸傾向である。

このハビトゥス概念を用いて、相思社の「水俣まち案内」を考察してみよう (平井 2012)。水俣まち案内とは、来訪者のグループに相思社スタッフが1人つき、考



エコパーク水俣、親水護岸での相思社水俣まち案内(2015年10月)。



相思社スタッフによる考証館展示解説(2016年9月)。

証館で水俣病の概要説明をした後、原因となった工場施設、水銀に汚染された海を埋め立ててつくった水俣湾埋立地、重症患者が多発した海辺の集落など、水俣病に関連する場所を案内してまわるといものである。スタッフは案内するあいだに、水俣病の歴史や被害者の経験について語り、さらには被害者の生に触れた自身の経験や感想、それをきっかけに自ら反省したことなどについて語る。話題の中心は水俣病の歴史や被害者の経験なのだが、内容的に強調されるのは、スタッフ一人ひとりが水俣で支援活動するなかで考えたことや感じたこと、社会や自らの人生について反省したことなどである。

こうした語りを通じ、考えるための素材が来訪者に提供される。わたしが現場で観察したところでは、多くの来訪者は、相思社スタッフの語りから強烈なインパクトを受けていた。これまで通りの振る舞いを続けていけば既存の社会構造を再生産し、ひいては将来水俣病を引き起こすことになるかもしれないという意識が芽生えるようになっていた。さらには、水俣で起こったことと、自己のまわりで起こっていることとを結びつけ、現在の社会のあり方や自らの行動パターンなどについて反省していた。では、こうした強烈なインパクトはどうやって生み出されるのだろうか。

聞き手が物語にリアリティを感じられるかどうかは、語られる内容とともに、その語りを認知し承認するような諸条件があるかどうか依存する (ブルデュー 1993: 127)。そうした条件のひとつに、語り手の信用性があ



水俣病歴史考証館に展示されているネコ実験の小屋(2016年2月)。

るだろう。相思社スタッフは、自らの支援活動を通じて学習したことに基づき、便利さや豊かさを追求しない、人間の連帯に基づく共生的な生活を実践している。彼らの語る物語がこうした実践のなかから生まれていると聞き手に感じられることは、聞き手が物語に共感することを促すことだろう。

第2の条件として、聞き手の性向が考えられる。聞き手のほとんどは、遠方からわざわざまち案内に参加するために水俣まで来ている。彼らは、語られる内容を真剣に聞き、それに共感するハビトゥスを備えた人たちであり、相思社の呼びかけに真摯に応答するようにあらかじめ性向づけられている。

第3の条件として、語りがおこなわれる環境がある。実際に被害が起きた場所、あるいは被害者の写真や遺品が詰まった展示施設は、そこで語られる物語が切迫し、劇的で、重要であると思わせる文脈を提供する。そうした環境との相互作用が物語を迫真性のあるものにしていくと考えられる。

ただし、相思社の語る物語がいかに衝撃的なものであったとしても、1回の体験でハビトゥスの全面的な変容が生じるなどということはない。とはいえ、こうした経験を繰り返すことによって世界観や倫理意識は少しずつ変化していくものだろうし、ひとつの運動への参加経験は次の運動への参加を導くことだろう。相思社を自己完結したひとつの運動体ではなく、より広い運動のネットワークのなかのひとつの結節点としてとらえることが重要である。

水俣病運動界

ごく簡単ではあるが、以上によって、ハビトゥス概念を用いた水俣病を伝える活動の分析を紹介したことにしよう。次に、わたしが現在取り組んでいる問いについて述べる。それは、相思社がいかにして直接行動から水俣病を伝える活動へと方向転換したのか、というものだ。この問いに答えるには、ブルデューの「界」概念が有効と思われる。

ブルデューはハビトゥスが現実の社会のなかでどのように作用するかを論じるために、界という概念を導入した。界とは、分化した社会のなか存在する相対的に自律したミクロコスモスのことである(ブルデュー2007: 131)。芸術界、宗教界、経済界など、社会は数多くの界の複合ととらえることができる。それぞれの界には、価値を賦与された特定の資源(資本)が賭け金=争点としてあり、別々のゲームのように、固有のルールや評価の基準のもとで、支配をめぐる闘争がおこなわれている。界に参入する者は、そこで闘いのルールを見分け、それに適応することができるハビトゥスを身につけている必要がある一方で、こうしたハビトゥスは界への参加を通じて獲得されていく。

社会運動界の下位界として水俣病運動界というものがあると主張することは可能だろう。水俣病運動界は、水俣病被害者への補償と救済についての正統な見方、およびそれを実行する手段へのアクセスを賭け金としている。この界は流動的で、教育界や芸術界のように確立された界ではないが、それでもある程度の自律的な闘争の場を形成している。言い換えると、水俣病運動界は専門知識をもつ活動家たちに独占されており、彼らは彼らが支援する被害者や、彼らを物質的、象徴的に支える支持者とは異なる独自の政治的利害関心にしたがって活動することがある。この界の主要な参加者には、活動家、被害者、行政、政治家、ジャーナリスト、場合によって法律専門家、対抗運動集団、加害企業などが含まれる。

水俣病運動界では、被害者団体、支援者団体、労働組合、政党などのさまざまな運動組織が、国家に対して圧力を加え、自分たちが求めるかたちで被害者に補償してもらおうと競いあっている。ここにおいて重要なことは、ある組織が活動方針を決めるとき、その選

択肢は、自分たちが所有する資源の分量とその配分によって、そしてそれが界全体のなかでどのような位置にあるかによって、すなわち組織間の力関係の構造によって、条件づけられるということである。

そして界のなかで支配的位置にいる組織はその優位性を利用して競争相手を威圧し、その支配的位置を強化する傾向にある。だとすれば、その変容はいかにして可能になるだろうか。ブルデュー(2006)によれば、界の内部の変化は、しばしば界の外部との関係における変化と結びついており、そうした外部との関係のなかでももっとも重要なものは、多くの場合、国家との関係である。

さらにわたしは、ブルデュー(2006)が企業を界とみなしたように、相思社も界として分析できると考えている。相思社は一人のカリスマ性をもったリーダーのもとで強固に団結する一枚岩の組織ではない。むしろ内部に競合や矛盾を含み統合がきわめて緩やかな集団である。その意味で相思社を、自己維持の必要性和外部からの制限や機会とのあいだで、メンバーが調整のあり方をめぐって競合している実践の場、すなわち界として把握することは可能と考える。相思社を界としてみるということは、メンバー間に活動の目的や優先順位をめぐって闘争があると想定することを意味する。

このように、界に注目することは、相思社による水

俣病を伝える活動への転換を、それを可能にした社会的諸条件のなかで求めることである。彼らの戦略転換を、彼らと他団体や行政との相互行為の結果とみることはできるが、相互行為における選択の可能性は、水俣病運動界の構造のなかでの彼らの位置によって制約されている。それゆえ彼らの戦略転換は、水俣病運動界の構造の変化、さらにその結果として相思社の占める位置に生じた機会や制約を考慮に入れることによって、意味がより明確になるといえるだろう。

負の遺産の生成

最後に、これから取り組もうとするプロジェクトについてその構想を紹介したい。近年、紛争やトラウマ、災害の経験を次世代に伝える場所やモノ、知識、実践など、いわゆる「負の遺産」が注目を集めている。負の遺産が注目されるのは、教育的な利用価値があることや、世界的な遺産ブームのなかで観光客を誘致する「資産」として利用可能であることばかりでなく、バーミヤン仏教遺跡やワールドトレードセンター跡地の事例でも明らかのように、保存や活用のしかたによっては社会に新たな分断を生む要因になりかねないことが背景にある。

これまでの遺産研究は、政府やその外郭団体によつて運営される多くの博物館や記念碑が被害者の声を軽

視あるいは抑圧し、遺産を用いて国家に都合のよい歴史像を作り上げていることを批判してきた。また、被害者や支援者が、そうした政府による遺産活用に抗議し、過去の加害記憶を公的に記録するように求めたり、場合によっては独自の博物館や記念碑を建てて対抗したりしていることを指摘してきた。「遺産」は場所やモノとしてただ存在するのではなく、異なる立場にある行為者の多様な実践の競合、対立、相互作用の結果として創造されると考えられる。と



相思社から不知火海を見渡す(2013年10月)。

ころが、そうしたさまざまな行為者の相互作用を通じて「負の遺産」が生成される過程を明らかにした研究はこれまでにあまりみられない。

水俣でも、1995年の政府解決策による和解、さらには2009年の水俣病救済特別措置法を経て、紛争が沈静化するにつれ、水俣病に関する場所やモノを貴重な「遺産」ととらえ、保存・活用する動きが活発になっている。2016年には、一連の水俣病公式確認60年記念事業が実施され、開館以来となる水俣市立水俣病資料館の展示全面改修がおこなわれた。熊本県では、水俣病関連遺産をユネスコ「世界の記憶」に申請することを検討しているとも聞いている。近年は、そうした活動において行政が中心的な役割を果たすようになってきている。

そこでわたしは、今後、行政主導による水俣での「負の遺産」の生成過程を記述してみたいと考えている。行政はどのような経緯で水俣病に関連するモノや記録を「遺産」と認識し、その保存・活用を先導するようになったのか。先行していた相思社による水俣病を伝える活動は、それにどのような影響を与えただろうか。

こうした問いに答えるためには、やはりブルデューの界概念が有効だとわたしは考えている。行政官僚のハビトゥス、水俣病運動界のなかでの行政官僚や水俣病患者、支援者、一般市民等が占める位置のあいだの客観的な関係の構造、社会のなかでの水俣病運動界の位置の変化、これらのものに焦点を当てることによって、水俣病運動界の変化、ひいては負の遺産の生成過程を明らかにできるのではないか。負の遺産は、社会のなかにそうしたものへの需要があることの直接的な反応として生成したのではなく、独自の歴史をもつ水俣病運動界のなかにその起源があるとわたしは考えている。

この際、行政も界としてとらえることが肝要だろう。ブルデュー(ブルデュー／ヴァカン 2009)が論じたように、一枚岩の組織としての「国家」という一元的な見方から決別し、それが包摂している内部の区分や闘争を、さまざまな被害者団体や支援者団体、その他諸勢力と結びつけることを試みる。水俣病の歴史をみても、行政のなかには、国、県、市といった各レベルで利害や行動パターンに違いがあり、さらには同じレベルでも担当任務によって異なっている。そしてその異なる

レベル間、同じレベルの異なる担当間でさえも、つねに性向、能力、資源はきわめて不平等に分布している。彼らは互いに競い合いながら、水俣病関連の政策を方向づけたり決定したりしている。そして被害者や支援者、保守的な対抗運動団体、市民などと情報交換し、連携しているのだ。国、県、市が自分たちの目的に合わせて一部の運動組織を利用し、諸勢力間の権力バランスをとることもある。反対に、運動組織が相互の権力闘争に国や県、市との連携を利用することもある。水俣病運動界の変容過程を解明するには、界のなかで行政の果たした役割を明らかにすることが不可欠だろう。

【参考文献】

- 平井京之介
2012「語りのコミュニティ水俣『相思社』におけるハビトゥスの変容」平井京之介編『実践としてのコミュニティ』京都：京都大学学術出版会。
ブルデュー, P.
1993『話すということ』稲賀繁美訳、東京：藤原書店。
—2006『住宅市場の社会経済学』山田鋭夫・渡辺純子訳、東京：藤原書店。
ブルデュー, P./L. ヴァカン
2007『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』水島和則訳、東京：藤原書店。
—2009『国家の神秘』水島和則訳、東京：藤原書店。
Bourdieu, P.
1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
Crossley, N.
1999 Fish, Field, Habitus and Madness: The First Wave Mental Health Users Movement in Great Britain. *British Journal of Sociology* 50(4): 647-670.
Crossley, N.
2002 *Making Sense of Social Movements*. Milton Keynes: Open University Press.
—2003 From Reproduction to Transformation: Social Movement Fields and the Radical Habitus. *Theory, Culture & Society* 20(6): 43-68.
Haluzi-DeLay, R.
2008 A Theory of Practice for Social Movements: Environmentalism and Ecological Habitus. *Mobilization: An International Quarterly* 13(2): 205-218.
Husu, H.
2013 Bourdieu and Social Movements: Considering Identity Movements in Terms of Field, Capital and Habitus. *Social Movement Studies* 12(3): 264-279.
Ibrahim, J.
2015 *Bourdieu and Social Movements: Ideological Struggles in the British Anti-Capitalist Movement*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan.
Samuel, C.
2013 Symbolic Violence and Collective Identity: Pierre Bourdieu and the Ethics of Resistance. *Social Movement Studies* 12(4): 397-413.

ひらい きょうのすけ

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は社会人類学、東南アジア研究、日本研究。主な編著書に *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (SES91 2015)、『実践としてのコミュニティ』(京都大学学術出版会 2012年)、『村から工場へ』(NTT出版 2011年)などがある。